

黒色綺譚カナリア派第六回公演

繭文

〜放蕩ノ吊ラレ作家〜

作 赤澤ムック

二〇〇七年二月八日〜一三日 ザムザ阿佐谷

登場人物

矢代一要（いちよう） 耐えられぬ男は長男だ
矢代双次（ふたつぐ） 屋根裏の作家は次男だ
矢代五太郎（ごたろ） 高み見物の男は三男だ
矢代三津子（みつこ） 守る女は長女だ
矢代四葉美（しふみ） 総括する女は次女だ
矢代六摘（むつみ） 野心を持つ女は三女だ
矢代七子（ななこ） 籠もる女は四女だ

多田十之輔 でしゃばりな男は兄弟達の従兄だ
幡多百子 紹介される女は多田の友人だ
幡多俊介 訪れる男は百子の弟だ

溝馳孝 もてはやす男は次男の後輩だ
茅野ハツカ 水をさす女は赤の他人だ

大所帯、矢代家の物語。

担いだり、担がれたり尻拭いの顛末。

吊雛に囲まれる舞台。具象というより抽象的な其処だ。

中心に迫るほど、色彩が強くなっていく。

中央に雛段のような高み。奥には天井裏のような通路。

終幕の頃、それらは赤い敷物に飾られ雛壇以外の何物にも見えなくなるであろう。

他はというと段を避け、質素で小さな男部屋と女部屋がある。

各々の部屋は奥の寝室へと続くようだ。

その家は矢代家の繭であり、他を排除する空間だ。

これは昭和以前の寓話である。

開演前の挨拶が終わると、双次が舞台上に顔を出す。客席をじっと見つめる。しばらく見つめている。そして日記帳を取り出し、何やら書き出す。

音楽

暗転。幕開けだ。

双次は位置、姿勢を変え、未だ書き記し続けている。

しかし今度は客席ではなく兄弟達についての其れだ。

大きな段に、矢代家の皆が正座で佇んでいる。

右から、一要、三津子、四芙美、五太郎、六摘、七子。

膝元に各々の名札が立つ。双次の空間が空いている。

双次の背、帯に、自身の名が書かれた札が刺さっている事が知れる。

一要 どうも皆さん

沈黙

四芙美 六摘

六摘 私ら、矢代と申します。仲睦まじい七人兄弟

四英美 五太郎

五太郎 毎日それはもう楽しく健やかに過ごしています

四英美 はいお陰様で、兄弟皆元気にやっております

三津子 私、もう矢代の人間じゃございませんから、その辺はちよつと

四英美 (咳払い)

五太郎 じゃあどんな事を言えば

四英美 そんな事言わなくていいでしょう

六摘 こんな兄弟いるって知れたら、恥ずかしくて外なんて歩けないわ

四英美 なんて事言うの

五太郎 そんな事となんて事はどちらがマシ

三津子 どちらかしらねえ

六摘 そんな事じゃない

四英美 皆、観られているのよ。私達

六摘 観られているわね

三津子 どうして

一要 双次

四英美 ここに居るから。六摘、そういう目つきはやめなさい。誤解されるわよ

三津子 そう、じゃあ、私はこの辺で

四英美 私達はこれからもずっと

一要 双次う

五太郎 あー

六摘 ねえ、私、この結い方おかしくはなあい

三津子 もう、いいんじゃない

五太郎 いいよいいよ。行こう

六摘 また飲むでしょう

三津子 なら飲んじゃえばいいじゃない、ね、みんなで

一要 腹が減った

六摘 お二人でどうぞー

五太郎 めかしたって変わらないぞ

六摘 元が可愛いから

三津子 とにかく、ここは居心地が悪いわ

四英美 五太郎、元の位置に戻って。三津子姉さんも余り勝手な事を言わないで。

六摘、向こうを見るの。皆、ちゃんとしなさい

五太郎 ちゃんとしたって

六摘 やっぱり違う結い方にすれば良かった

一要 腹が減った

五太郎 喉が渴いた

三津子 (退場する)

四芙美 ちゃんとするの、ちゃんと。そうでなければまた、私たちの醜聞が、双次兄さんの文字で残されてしまいますよ

一要 腹が減った (退場)

六摘 もっと可愛らしい柄にすればよかった (退場)

四芙美 一要兄さん、六摘

五太郎 一杯やらなきや (退場)

四芙美 五太郎

段には四芙美と黙り込む七子が残される。

四芙美 まったく、なっていない兄弟なのです。お恥ずかしい限り・・・さて

双次は去っていく兄弟を眼で追う。そして四芙美と視線が合う。

双次 四芙美には、興味が無い

四芙美は慌てて退場する。

七子 忌まわしいのは鮮やかな、いつぞやの夕暮れ、いつぞやの追う声、責める声。音さえ染まった夕焼けの、桃や朱でない赤い色。体は塩梅丁度よく、しかし乱す声無き人々の糾弾、忌まわしきあの幼子の、開けた口の恐ろしい赤を、落ちる夕陽に重ね見て、触れようか、触れまいか、迷う私の迷い指、我が口元へ押し戻し、噛む指先からまた赤が、股ぐら伝うその赤と、この赤なかが違おうか。同じと見えるは私だけ。不実の赤と陽の光、どちらも私の影を濃く、ぬめり沈んでいくように、赤こそ闇の産みの親・・・ねえ兄さん、どうして私の体からは姉さん達のように血が流れ出ないのかしらん

双次 さてね。そういう風にできていないのだろうね

七子 どうすれば、そうなるの

双次 さて。願えばいいのかな

七子 じゃあ願う

双次 うん

七子
.....

双次 覗いているのではなく、ただ僕の目の前にお前がいるだけ。不愉快ならば姿を消しなさい、誰からも見えない場所へ逃げなさい

七子 お兄ちゃん

双次 僕はお前に何もしてやらない。お前も、人に願うのではなく、自分でそういう状況を避ければ良いのだ

七子 (溜息、とぼとぼと退場)

双次は自身の空間に座り、札を立て、先ほど書き記した日記を読み上げる。

双次

午前十時二十分、極度の妄想癖の為に外出できぬ七子を残し、兄弟達は皆出かけていった。四葉美は相変わらずの地味な着物のまま、六摘は対照的に華やいだ少女のそれで。六摘の自意識に上限は無い。しかし、女とは何故かくも容姿に自身を投影しようとせしめるのか。それは卑しさに似通った思考ではないかと常々思う。五太郎は喉の渴きを訴えていた。今日も酒を飲むのだろう。彼の欲する物は潤いではなく意識の混濁だ。一葉兄さんはこうして、過ぎる日々を傍観する我が身を責めるように見つめたが、彼の目からは、精気は微塵も感じられず、自身の行動に付属する確かさが無い。腹が減ったと言う発言すら、兄弟達の耳には引っかけりを持たない。存在自体が膿なのだ。つまり、責められているように感じるのは私の一方的な主観であり、私に巢食う弱き心の負い目であり、実際、兄は私をただ眺めたに過ぎないのである。そして兄こそが、自身の心に巢食う何かに蝕まれ、本来の姿を失っている。その何かとは、私と通ずる何かだ。言葉を持つてして、それを共有する事は可能だろう。しかし、声という儂くも印象的な音で通じ合う事を、私達は敬遠している。きつとどちらかが死ぬまで、敬遠し続けるのだろうか

双次は皆の名札を拾い抱え、客席を見据える。

双次 観察者は謙虚でなければならない

音をたて吊り籠がふり落ちる

音楽

タイトルコール

近所の餅撒きから六摘が帰宅する

双次 午後零時三分。三女、憤慨した形相で足音けたたましく帰宅

六摘が身なりを気にしていると、五太郎が帰宅。

六摘 (五太郎をどつき、座らせる)

五太郎 案外、うまいもんだよ

六摘 私達の印象も台無しでしょうね

もじもじする五太郎。四芙美も帰宅する。

しばらくし、とぼとぼと一要が靴を履いたまま帰宅。

六摘 姉さんからも言っつてやっつて頂戴

五太郎 親父さん達もみんな飲んでた

六摘 まー恥ずかしい。一要兄さんはちやあんと断つてらしてよ。ねえ

五太郎 飲めば良かったのに

一要 (呆然としている)

四芙美 五太郎。お兄さんに変な事を言わないで

五太郎 ・・・・

六摘 五太郎兄さんのおかげで、私達みんな変な風に思われたわ

五太郎 ああ、あそこの家に取り入りたかったのか。あそこのご子息に

六摘 野蠻人

五太郎 現金女

六摘 まー

四芙美 二人とも、そんな事で大声出さないの。まあ、とりあえずご挨拶したん

だから、それで良いでしょう。ご近所付き合いなんで、これぐらいで

五太郎 そうだよそうだよ

六摘 控えると約束したの一昨日じゃなかった

五太郎 三日もつたんだ。これぐらいの事・・皆から比べれば上等なもんだ

六摘 (慌てて) 五太郎兄さん

五太郎 これぐらい何だっつてんだ。あはは

四芙美 五太郎！六摘！

六摘 (五太郎を睨む)

と、双次がその会話を覗いている事が一要以外の全員に知れる

四芙美 ふざけ合う暇があるなら、一要兄さんの靴を脱がせて頂戴

六摘 はあい

四芙美 五太郎、雑巾お願い

五太郎 どこ

四芙美 電話台の下よ。靴は靴箱に入れず置いておくのよ

六摘 はあい

五太郎 四芙美姉さん、これでどうお

四芙美(うなづく)

一要是六摘にされるがまま靴を脱ぎ、立ちすくんでいる。

五太郎は靴の泥で汚れた床を拭く。

その様を双次は、じっと見つめている。一要が双次に気付く。

六摘 ああ仲良し家族

四芙美 一要兄さん、今夜はなにが食べたい

六摘 私、お魚がいいわ

五太郎 嫌いなくせにい

六摘 お魚の白身を食べると、肌が白くなるんですって

四芙美 じゃあ、鱈にしましょうか。兄さんも好きで・

一要 なあに見てるんだ！

一要が怒鳴ると全員が息を飲む。

四芙美 六摘

六摘 ・・・どうしたの、一要兄さん。そんなに大きな声出したら驚いちゃう

四芙美 ねえ

五太郎 肉の方が良いよねえ

四芙美 それなら

一要 双次、お前、なあに見てるんだ！

再び凍りつく矢代家。

四芙美 六摘

六摘 ・・あ、双次兄さん。気付かなかった

一 要 こそこそと

四 芙美 あら、双次兄さんいたの。声をかけてくれれば良いのに。ねえ五太郎

五 太郎 そうだよ。楽しかったよ餅撒き

六 摘 楽しかったわ

双次 (独白のように) 見ていたわけじゃないよ。今ね、たまたまここを通りかかっただけなんだ。・・(日記に筆を走らせ) 午後零時八分、皆無事に居間へ集合。早速の喧騒・部屋を眺めていたら皆がどこやらの餅撒きから帰ってきただけ、僕の視界に入り込んだだけ。どちらが先客かといえど僕の方が。言わせてもらえるのなら、皆の方が僕の邪魔をしている・・
そうよね、ごめんなさい。ほら一 要兄さん、そんなカッコしないで

一 要 (双次を凝視している)

双次 なあに。やだな、なんだよ

四 芙美 今日は人が大勢で疲れたわね

一 要 (四芙美に連れられ男部屋へ退場)

双次 なんだよ、嫌だなあ、もう

六 摘 五太郎兄さんたら、調子に乗ってお酒飲んだのよ

五 太郎 新しいご近所さんに好青年がいたからって、格好つける必要が僕には無いからね

六 摘 (笑顔だが血管が浮いている) 私が気取っていたとでも

五 太郎 気取っていたというより、媚びていたな

六 摘 失礼しちゃう。それじゃまるで三津子姉さんじゃない

五 太郎 似てきたんだよ

六 摘 双次兄さん、なんとか言ってやって

双次 ・・・

六 摘 (双次を二度見) この家で私の味方、双次兄さんだけだわ

五 太郎 ・・見ていられないや(台所へ退場)

六 摘 見なくて結構。ね、双次兄さん

双次 あは

六 摘 (ねえねえお兄さんは家を出ようと考えた事なあい)

双次 (首を横にふる)

六 摘 こんな辛気臭い家を出て、溝馳さんなんかと一緒に同人活動したら良いのに。なんなら私と一緒に暮らすってのはどうお。私が女学校を卒業した時に。兄さんには絶対才能があるもの。ね、兄さんいつも書いてるでしょう、その、日記に

双次 日記だよ

六摘 見せて

双次 駄目だ

六摘 いいじゃない、ちよつとだけ

双次 駄目だったら

六摘 じゃあ、それちよつとだけ貸して

双次 これは僕の日記なんだ、人に見せたり貸したりするものじゃない

六摘 そんなに見せたくないのなら文字になんてしなきゃいいのよ。思っているだけで十分じゃない、それを書くっていう事は、人目に触れさせて構

わないとそういう事よ

双次 六摘の言ってる事は屁理屈だ

六摘 形を残される物には、他者が謁見する権利があるっ

双次 なに言ってるんだ

六摘 ね、私にそれを託してみましよう。お兄ちゃん

双次 嫌だ

六摘 ・・・ずるいわ。そうやって独り占めして。わざわざ気になるような事

して、弄んで、私だけは双次兄さんの事、ちゃあんと理解してあげてる

六摘 嫌だ

双次 嫌だ

六摘 見せてくれたら泣き止むわよ

双次 ・・・

六摘 ・・・

双次 この家で頑固じゃないの私だけだわ (退場)

双次 ・・・

一人残される双次は、再び観客を凝視する。しばらくし、何やら日記に記す。
満足そうな顔をして背を向ける。

すると皆が戻ってくる。一要、四芙美、五太郎、六摘だ。

五太郎 抜け駆けしようとした奴がいるなあ

六摘 え、何のお話

四芙美 ああいう風に刺激しては駄目よ

一要 奪ってやればよかつたんだ

六摘 ほら、一要兄さんもこう言ってる

四芙美 安易な考えよ

六摘 みんな嫌だっと思ってるもの、でしょう

五太郎 そりゃ嫌さ。男同士だからって風呂まで覗かれちゃ

六摘 だから私が一手に引き受けてあげましょうって

四英美 六摘

六摘 (鼻で溜息)

五太郎 双次兄さんを担いで

六摘 いけない

四英美 いけないに決まっています。姉さん、そういう女が肩で風切るよ

うな考え方、嫌いだわ

六摘 三津子姉さんのようなのが幸せだと

四英美 そうよ。ああいう生き方が女の幸せです

六摘 じゃあ四英美姉さんも、三津子姉さんのようにお見合いしてみたらどお

四英美 私には、やらなくてはならない事が、まだたくさんあるのよ

六摘 私にだって出来るもの

四英美 やってみる

六摘 え

四英美 やってみる

六摘 四英美姉さんはズルいわ。そうやって私が辛くなるような事ばかり言つて、理論責めで、困らせて

四英美 六摘が出来ると言ったのでしょ

六摘 三人の世話だつて、頼まれたのなら私にも出来る。ね、一要兄さん私の

事が好きでしょう。でも姉さんが何でも自分でやってしまうから、私にはそれが出来なくなってしまうたのよ。そうでしょう、五太郎兄さんだつてそうだから、出来ないじゃない

五太郎 俺は働いているからね

六摘 (ぐうと黙る)

四英美 貴女はそうやって、すぐ何でも人のせいにする

六摘 違うわ、嘆いているのよ

五太郎 あはは

七子が「あー」と叫ぶ声が聞こえる。

四英美 はいはい

一要 (無言で七子の元へ移動)

五太郎 代わりに行ってみれば

六摘 嫌よ、また涎で汚されるもん

四芙美が七子の元へ移動しようとする、溝馳が数冊の本を持ち登場。

四芙美 こんにちは

溝馳 お邪魔します、双次先輩は

四芙美 変わりないですよ。あ

溝馳 そうですか

四芙美 それは

溝馳 先輩の活力の素、です。いい考えだと思って

四芙美 どうでしょうね（弟妹に目配せをし、移動）

溝馳 いい考えだよ、きっと

六摘 まず双次兄さんが、それらを手にとるかどうかが問題よ。残念ながら学

校を辞めた頃から、そんな姿は見た事がないから

溝馳 でも、夜中にこそりと開いてみるかもしれないでしょう。あんなに素晴

らしい小説を書いていた人だもの、熱意が完全に消えてしまっただなんて

信じられない。今年の新入生もこぞって先輩の寄稿した同人を読み漁っ

てます、なぜこの作家が大成しなかったのだろうと頭を垂れ膝を打ち、

その作家が今や自室に籠るばかりの日々と知り嘆き、こうして僕へ期

待を寄せ、ほら、巷で流行の小説本、差し入れてあげて下さいと皆が持

ち寄ったんです。色々ありますよ、純文学から気鋭の短歌：

六摘 これは

溝馳 ああ、それが今回一番の変り種。刺激されますよ、先輩なら

六摘 へえ

或る男の自伝的、日記風小説です。荷風の二番煎じとの悪評もあります
が、若い連中の支持は凄い。その男を取り巻く兄弟達の、変質的な日々
を淡々と書き綴っているのです。湿ってますよ。その男というのも兄弟
に負けじ劣らずの変質的性分で、筆が悪意に満ちているというか、皮肉
めいているというか…ともかく、その斜に構えた作風が面白いんですよ。
歯に物着せぬ言いつぶりがね。突拍子もない設定すぎるので、僕は完全
なる架空の物語と睨んでいます。しかし粗がありすぎる

五太郎と六摘は顔を見合わせ、にやりと笑う。

六摘 まあ。粗があるの

溝馳 （うなづき）そんな物が売れるのは文学界の悲劇だ。先輩もきつと憤怒す

る事でしょう、そんな物が売れてしまう現状を嘆き、再び自らが筆を握

る決意を：

五太郎（小説を一冊奪い）溝馳君、これ貸してよ。読んでみたくなった

溝馳 え

五太郎 いいだろう

溝馳 でも、それは先輩に

五太郎 読み終わったら、渡しておくから

溝馳 でも、僕が先輩に直接こう解説したり

六摘 兄弟のお話なら私も興味があるわ。だって、私達も七人兄弟ですもの

溝馳 ・・・そういえば、その兄弟も七人だ。面白いですねえ

六摘 面白いわねえ

五太郎 面白い

溝馳 ならば、やはり第一に先輩に

六摘 溝馳さんの熱弁に感化されて、私、すぐにでも読みたくなってしまったの

溝馳 ・・・・・（照れている）・・・

六摘 駄目かしら。私達が読み終わったら、必ず双次兄さんに届けるから

五太郎 決まりだ。行こう、六摘

六摘 もう、ご自由にどうぞ

五太郎と六摘はきやつきやと退場。

取り残される溝馳。双次の元へと移動する。

が、双次は七子の部屋を覗き見している。溝馳はその双次を見つけても声かけ
らず。

泣く七子を抱きかかえる四芙美へと場は移り。

傍らに、黙って座る一要の姿も在る。

四芙美（子守唄を歌っている）

七子 ・・・（人の気配を感じる）

四芙美 溝馳さんよ。たくさんの本を持って。双次兄さんへ渡しにいらしたの

一要 （四芙美を見る）

四芙美 受け取りやしないでしよう。落ち着いた

七子 （うなづく）

四芙美（立ち上がり）

七子 今度ね

四芙美 なあに

七子 今度、外へ出てみようと思うの。まだ早いのは分かっているわ、でもちよつとだけ。こうしてその日を待つ、とても苦しいから

四芙美 いいの

七子 ん

四芙美 外に出てしまつて。貴女に、そんな事ができるの

七子 出来る、兄さんや姉さんの手、もう煩わせたくないし

四芙美 私は、妹の世話を煩わしいだなんて思つていません

七子 一要兄さん、嫌でしょう

一要 (首を横にふる)

四芙美 この家の皆、私と同じように思つていると思いなさい

七子 ・・・うん、でも、私だけこんなに遅いのは恥ずかしい事でしょう

四芙美

今の貴女を見てみると、とても外に出られる状態だとは思えませんよ。外に出るといふ事は、他人様の前でちゃんと挨拶が出来たり、それも相手の気に障らぬよう笑顔でね、目標に向かい、きちんと何事かに取り組む事ができる人の事を言うのよ。七子、貴女はこの家の四女として恥じのない行動ができますか。人様の目を、言葉を発する事、辛い言葉を投げかけられる事に怯えずにいられない、出ません。私には無理なもの
七子 ごめんね、ちよつと思つてしまつただけ
四芙美 ・・・うん。そうね、七子
一要 四芙美
いいのよ。私達はね、七子に辛い目あつてほしくないだけよ

溝馳は、双次が日記に筆を走らせている事に気付く。

溝馳 何を書かれているんですか

双次 (慌てて日記を閉じる)

溝馳 先輩、これは偶然ではなく運命の一致だ

一要 四芙美、七子も双次の悲鳴に驚き、仰天する。

双次 この覗き野郎

一要 双次う

溝馳 そつくりだ、凄いですよ、これは凄い事です。それとも先輩はあの小説をご覧になつていたんですか。僕の考えはもう実行されていたんだ、ああ凄い。これで世の中をあつと言わせられる、あの「眩暈のある散歩」

など、取るに足らない屑本と知らしめる事ができる

双次 眩暈

溝馳 「ご存知ありませんか「眩暈のある散歩」という小説を

四芙美 女の部屋を覗くだなんて良いご趣味ですこと

溝馳 これは失礼、ここが四芙美さんのお部屋だとは。ああ一要さんまで

四芙美 妹二人と共用の部屋です

溝馳 ああ、すいません

四芙美 双次兄さんにも、あまり強引な事しないで頂きたいものだわ。迷惑なんです。こうも度々押しかけられてはね。慕って下さる事は、私も嬉しく
思いますけれど、こういう事があるのなら・・・

溝馳 いえいえ、もう決して。今日のところはこれでおいとまさせて頂きます。

後日、また改めてお伺いさせて頂きますので

双次 ……(溝馳の持つ小説本に興味がありそうだ)・・・

四芙美 お送りしますね

溝馳 かたじけない。ああ先輩、これを、あと先ほど言った「眩・・・

四芙美 溝馳さん

溝馳 ああ、すいません(と、頭を下げながらも小説達を双次に強引に渡す)

四芙美に追い出されるよう溝馳は退場。

七子 兄さん、嬉しそうね

双次 家にある物は、とうの昔に全て暗記してしまつたし

七子 そう。私も早く外に出られるようになりたいわ

一要 すぐに出られるようになるさ

双次 (一要进行一瞥)

階下には四芙美、小説を読む五太郎、六摘が。

四芙美 もう読んだでしょう

六摘 でも持つてはいないもの。私のお友達なんか学校に持つてきてたわ。家
じゃ恥ずかしくて読めないからって

五太郎 不健全だって

六摘 そうよ、不健全、指定図書だわ

四芙美 明日の準備は終わったの

六摘 姉さんやっておいてえ

四美美 五太郎も。また鞆にお酒こぼれてたわよ

五太郎 ああ

四美美 拭いておきました。まったく、溝馳さんには目が離せないわね

六摘 これは双次兄さんに渡したと嘘をつくわね

五太郎 「三女が用足しに行くたび便所紙が尋常でなく減っている。彼女はいったい何をどこまで拭いているのか」

六摘 やめてよ

五太郎 好きなんだからその本

六摘 (小説を取り上げ) 「三男は三女と口論をし終えると、再びウイスキーの小瓶を取り出し二、三口一気に飲み込んだ。彼が酒に手を伸ばすのは、兄弟の中で誰より先に働きに出たせいかな、それとも弱き自分への言い訳なのか」

五太郎 分かってらっしゃる

四美美 やめなさい。どこで聞いているか分からないでしょう

四美美が小説を取り上げると、多田が登場する。

多田 溝馳君が泣いて帰ってったよ

六摘 四美美姉さんにこっぴどくやられたのよ

多田 彼の熱狂ぶりは凄いものね

四美美 何年も前に手習いで幾つか雑文を書いたただけなのに、追い回して

多田 しかし現に今なお売れているんだから

四美美 ……

多田 あー…実際の作家は違えど、だね

六摘 多田さんてば優しいわ。でも、もっと過激でもいいのじゃない

四美美 よしなさい

多田 今は覗かれていないよね。はい

四美美 いつもすいません。お手数かけさせてしまっ

多田 いいんですよ、郵便局員が手紙を宛名の元へ配達する事は、それこそ苦

などではないのですから

四美美 六摘、糊と鉄をお願い

六摘 お二人で探しに行ったらー

五太郎が六摘に肘打ちをする。

多田 昨晚も読み返してしまいました。眩暈のある散歩

四芙美 まあ昨晚も

多田 特に四女の節が堪らなく面白い。七子ちゃんは、部屋ですか

四芙美 ……ええ

多田 では、ご機嫌伺いに参ります

四芙美 あの、多田さん。今日は、七子の具合がかんばしくなくて

多田 それはいけない(と、颯爽と七子の元へ)

六摘 ……御執心ですこと

四芙美 (六摘を睨む)

六摘 多田さんが、七子によ。お姉さん

四芙美 変な勘ぐりはよしなさい。はしたない(七子の元へ移動)

六摘 日曜日は嫌い

五太郎 分かるよ、その気持ち

七子の部屋には、一要と双次がいる。

双次 郵便屋さん。日曜まで何の御用

七子 (顔を背ける)

一要 (七子の頭を撫でる)

多田 ご機嫌斜めか・

四芙美 七子、せつかくいらして下さったんだから、ご挨拶なさい

多田 僕が押しかけたようなものですから。別にいいよ、七ちゃん

四芙美 でも

多田 僕が勝手に、いつかまた、昔のように遊べたらと願ってやまないだけです

一要 年頃ですからね、無理じゃないですかね

四芙美 一要兄さん

一要 そうだろう

四芙美 そうだけれど。もっと言い方があるのじゃないかしら

一要 (ムっとする)

四芙美 幼馴染のようなものだもの、多田さんだけは良いのじゃないかしら・

一要 (退場)

多田 ありがとうございます

四芙美 いいえ。七子の事を心配して下さい、私にとっても嬉しいのです

七子 (お手玉を多田に投げる)

多田 やろうか

四芙美 (立ち上がり双次へ) 見ていて下さいね
双次 (うなづく)

四芙美は独り、男部屋にて隠し持っていた小説を読む。

四芙美 ……「次女だけは、この狂った家の中で規律を持ち、自らを戒め、外れたまま狂騒する車輪に歯止めをかけている。それはタガの外れた我が家において、酷く愚鈍で、堪らなく偽善的な生き方にも思えるが、彼女無くしては、我ら兄弟が兄弟せしめられぬ事も事実だ。その慈愛、その誠実さ、家庭的な雰囲気ほどの男子をも」……「嫁に迎えたいと、虜にさせる女だ」……ああ

四芙美は激しく小説を閉じる。

四芙美 馬鹿らしいほど大袈裟に。こう書けば、そう成り得ると思ったのだけれども

七子と多田の、お手玉歌が聞こえてくる。

四芙美 なかなかどうして、成り難いものですねぇ

四芙美は改めて小説を開き、書かれた文を読み、頁を破る。
一要が登場し、四芙美の手から小説を奪う。
四芙美は反抗しそうになるが、一要の肩を抱き寝室へ。
缺を持った六摘と五太郎が、多田から届けられた手紙を読んでいる。
遊びを終えた多田が、二人の場へ登場。

六摘 嫌なお報せ、どうもありがとう

多田 そんな訃報が混ざったの

六摘 訃報も訃報、三津子姉さんが帰って来るって

多田 そう。久しぶりじゃない

六摘 何年ぶりかしら、結婚して、もう三年

五太郎 (餅を食べている)

多田 ああ、行ったのかい幡多さんのお宅

六摘 兄弟総出で行ったのよ。一応ね、礼儀知らずと思われちゃ恥だもの

多田 あそこのお宅、僕の幼馴染がいるんだ

六摘 ふうん

五太郎 うちの妹に紹介してやってくれないか、餅撒きで一目惚れしたらしい

六摘 兄さん

多田 へえ

六摘 違いわ。立派なお家の立派な青年に見えたから、仲良くしてあげても良いわと思っただけの事よ

多田 生憎僕の幼馴染は姉きみの方で・・・ああ、こういう提案はどうだろう

六摘 なあに

多田 その子を、双次君に紹介するっていうのは

六摘 え

多田 そうすれば、彼もまた快活に戻れるのではないかな

袖から「ごめんください」と百子の声。

六摘 やだ、誰かしら。三津子姉さん

五太郎 三津子姉さんが声なんかかけるかい。はい

百子 私、先ほどはす向かえで餅撒きを催した幡多の家の娘で百子と申します。

ご挨拶代わりに、もし良ければこれを。余り物で申し訳ないのですが、
大人数の兄弟さんがいらつしやると伺ったもので

多田 ああ百子さん、ちようど良い

五太郎 どうぞ

百子 ・・・あら、十之輔さん。どうしたの

多田 ちようど貴女の話をしていましたよ

五太郎 餅だ

六摘 良かったわねえ

百子 私の

五太郎 でも多田さん、こんなに急じゃ双次兄さんにおかしく思われるよ

多田 そうだろうか。ねえ百子さん紹介したい人がいるんだ、とても素敵な人だよ。ここの、ここ七人兄弟なんだけど、二番目のお兄さんと双次君と
いうんだ

え

百子

多田 ちよつと挨拶していかないか

六摘 いいわよ、そんな無理強いしなくて

多田 三女の六摘さん、三男の五太郎君

百子 はじめまして

五太郎 どうも

六摘 (会釈)

多田 まあいいじゃないか。僕もこちらへ越してから、この矢代さんには家族のように良くしてもらってるんだ。君もすぐに仲良くなるさ

百子 ええ、それは素敵なお話ですね・・

多田 矢代さんのご両親、蒸発しちゃってね、それ以来兄弟七人で力を合わせて頑張っているんですよ。百子さんは、いつからこちらに

百子 家が建つのが来月終わりなので、その頃に

多田が百子の手をとり、双次を探して七子の元へ移動。

六摘 ちよつと多田さん。四葉美姉さん

多田 双次君、紹介したい人がいるんだ

双次 帰ったかと思った

百子 まあ・・・可愛らしい。お人形さんかと思った

七子 え・・・

双次 そちらは

多田 幡多百子さん。さつき行ったのでしよう、餅撒き

双次 僕らは勿論遠慮した

多田 そうですか

百子 はす向かいに越して来ます、幡多百子です。初めまして

七子 はじめまして！

双次 どうも。私達は矢代と申します。七人兄弟でしてね、上から一要双次三

津子四葉美五太郎六摘に七子

七子 私、七子です

多田 百子さんは僕が小さい頃に住んでいた町からいらしたんだ、七子ちゃん
の前の幼馴染さ。僕の幼馴染の先輩っていう事だ

七子 うん

双次 変な言い方だね、なぜ七子が後輩だなんて呼ばれ方されなきゃならない
んだ、そりゃ君の独善的、自己中心的な考えだよ気持ちが悪い

多田 それは失礼、双次君は手厳しい

七子 よろしくお願い致します、百子先輩

百子 いやだわ十之輔さん、七子ちゃん本気にしてしまったじゃないの。百子

でいいのよ。百子と呼んで。私の家は弟が一人でしょう、こんなに華やかな家族、羨ましいわ

双次 僕らに家を建てる力はありませんけどね

百子 え

双次 あまり矢鱈滅多ら、人を羨むのはいけない。失礼な事だ

百子 ああ、ごめんなさい

双次 簡単に同情してみせるも、いけない。君は相当に育ちに恵まれたようだね、女性は恵まれてるに越した事はない。七子と取り替えてやりたいぐらいだ

百子 すいません

双次 そうか、謝るのがお好きなんだ

百子 あまり長居するのも申し訳ないわ、おいとましましょう

双次 それが賢明です

多田 双次君

双次 そうだ、丁度いい。これを出そうと思っていたんだ

多田 珍しい

双次は日記を千切りさらさらと目の前で筆をとり、簡単に折る。

双次 新しいご近所さんの幡多百子さんへ、宜しく頼んだよ

多田 え

七子 また、いらして下さい。もし、こんな家で良かったら

百子 ……お兄様の、許しが頂けたなら

双次 ……いいですよ。七子がそう言うのなら

百子 良かった。またお邪魔させて下さいね、七子ちゃん、またね

七子 またね

多田と百子は居間へ。七子が狂ったように顔を隠す。

七子 恥ずかしい、恥ずかしい、恥ずかしい

双次 どうした

七子 もっと可愛いお返事できたらうに、私

双次 (日記を取り出し、今起こった事や七子の台詞を書き写す)

居間。

五太郎 あら、お見合いは失敗

多田 いえ、また遊びに来る約束をとりつけましたよ。はい、郵便です

百子 ありがとう。(嬉々と封書を開ける)・・・「無礼者には非礼で」・・・

五太郎 へえ。なにそれ、双次兄さんからの恋文

百子 五太郎さん、お餅がお好きなの

五太郎 え

百子 まだたくさんあるから、持ってきますね

五太郎 ・・そりやどうも

百子 六摘ちゃんは何が好き

六摘 ・・・・・

五太郎 同姓相手じゃ、こいつうまく喋られないんだ

百子 年頃だと女同士の方が照れくさいものね。じゃあ、何か女の子が好む物を持ってくるわ

多田 俊介君は向こうの家に戻ったのかい

百子 ええ、あの子は勉強に忙しいから、ご近所周りは私の役目よ。それじゃあ、またね六摘ちゃん、五太郎さん

多田 気持ちが悪いでしまったかな。双次君、口の手厳しさには定評があつてね

百子 いえ、あんな風に厳しく言われたのが初めてだったから。驚いてしまっただけ

多田 じゃあ、また(退場)

百子 無礼者には非礼で、ですって。愉快な方ね(退場)

五太郎 はーい

六摘 嫌な感じ

五太郎 そうだね

女部屋、四美美が七子の元へ戻る。

四美美 どうしたの

双次 多田君が、越してきたとこの子、連れてきたんだ

四美美 え

七子 百子さんというの。また、いらしてくるって。百子さんね、私の

四美美 まるでお友達のような口ぶりね。でも、姉さんあまり関心しないわ、他

人の家にならずか上がりこんでくるような女性とのお付き合い。挨拶が

したいのなら、私達が餅撒きに顔を出した時に礼を見せれば良かったじゃない。だのにわざわざ、行きたがらなかった人達の元へ乗り込んで

七子 多田さんが

四芙美 だから彼が居る時間に行こうと言ったのよ。それなのに六摘も五太郎も用意だなんだで手間取るから・・一要兄さんだって・・。じゃあなに、遅れてしまったのは皆をちゃんと出来なかつた私の責任だから、こうした無礼をされるのも私の責任だと、七子あんたはそう言うの

七子 言っていないよ

四芙美 双次兄さん、どうしてこういう時はちゃんと見ていてくれないの
双次 (四芙美を凝視している)

四芙美は溜息をつき居間へ移動。五太郎を見つけると頬を打ち。

四芙美 どうして見知らぬ人を家へあげるの

五太郎 ごめんなさい

六摘 呼んだのよ、姉さんの事(封書を渡す)

四芙美 上げる前に、もつとちゃんと呼ばないと駄目でしょう

六摘 ちゃんと呼んだわ

四芙美 私に伝わらなければ呼んでも同じです

六摘は届いた封書を四芙美に渡す。

四芙美が目を通す。

五太郎 ああ、糊

四芙美 いらぬわ、三津子姉さんからの一通だけだから

六摘 (四芙美の機嫌とりにおどけて) 三津子姉さん帰ってくるのね。向こうの家で嫌な事あったんだわ。ほら筆圧で便箋が破けてしまいそう

四芙美 今度からちゃんと呼ぶのよ。何かあってからじゃ遅いんだからね

言葉を失い唇を尖らす五太郎と六摘。

双次が七子の元を移動し、その様を凝視している。

双次 午後六時四十分、中程の兄弟達は家内製手工業・・

四芙美 来客が多い日だったわね。姉さん疲れたわ。もう休みましょう

六摘 まだ早いわ

四美美 双次兄さんに見られているわよ

四美美が女部屋へ移動。五太郎と六摘も「はい」と返事をし、各々の部屋へ。双次もその流れに合わせて背を向ける。

男部屋、女部屋で就寝の準備がされる。全員、部屋の奥へと退場。しばらくすると原稿用紙を持つ四美美が戻り、男部屋の前へ。

五太郎が酒と双次の日記帳を持って登場。

五太郎 ちよつと読ませてよ

四美美 駄目よ

五太郎 ちええ。每晚執筆熱心で助かります、担当者としては

五太郎は酒を飲み、へらへらと奥へ退場。

四美美は日記帳を受け取り、居間へ移動、日記帳を開き読み耽る。

四美美「極度の妄想癖の為に外出できぬ七子を残し、兄弟達は皆出かけていった。

四美美は相変わらずの地味な着物のまま」・・・

日記の内容を原稿用紙へと書き写す。

四美美「地味な着物の」・・・地味。貞操の硬い正しい婦女子の装いで。「六摘は対照的に華やかな」・・・六摘はまるで安蛍光灯に群がる蛾のような華やかさで・・・しかし、女とは何故かくも容姿に自身を投影しようとするのか。それは卑しさに・・・」まったくよく言うわ。「五太郎は喉の渴きを・・・」

ぶつぶつと四美美は書き写し、捏造を続ける。

次第に日記に夢中になり、一人笑ったり、怪訝そうな表情になったり。

四美美 忌まわしいのは、ここに書かれた文でなく、これを記した人でもなく、こうして盗み読む私の行為。それを恥じる心があるのに、夜の読み耽りを自制できぬ、私の・・・好奇心。いや、正義。破綻した家族を唯一繋ぐ、この秘密を、取りまとめる正義。例え其れが私ら兄弟の恥部でも不健全な秘密事でも。その日の食費、生活費に勝る、隠すべき恥部など兄弟にはありはしないのよ

ぶつぶつと言いながら四芙美はそつと男部屋へ消える。
朝が来る。

身支度を整えた六摘が登場し、置かれた原稿用紙を読む。

六摘 嘘お。嫌だあこんなの

と、筆記用具を見つけ、台所より四芙美が戻る事に気付かず書かれた文を訂正する。

六摘 三女は隣人からの突然の求愛に、可愛らしい・・・えっと、肯定とも否定の意味ともとれる微笑で、その場を、いなした。我が妹ながらその魅力の強さには閉言させられる。つと

四芙美 勝手な事をしないで

六摘 だって、あんまり酷いんだもの

四芙美 仕方がないでしょう

六摘 「安蛍光灯に群がる蛾」だなんて書かれてるのよ、「男とみれば誰彼となく媚を売り」だなんて。失礼だわ

四芙美 その酷さが受けていると、貴女言つてたじゃない

六摘 誰も見ないからって、四芙美姉さん、自分のとこだけ書き換えているの
でしょう

四芙美 変えちゃいけませんよ

六摘 双次兄さんには四芙美姉さんが聖人に見えるのね

四芙美 自分を褒めちぎる文章を書き写す方が、侮蔑の言葉を書き写すより余程
恥ずかしいわ

六摘 ……ふうん

五太郎が起きて登場。

五太郎 おはよう

四芙美 おはよう、早いね。悪いんだけど朝食の準備がまだなの、少し待っ…

五太郎 (首を横に振り) 胃が重いんだ

六摘 飲みすぎよ

五太郎 (原稿用紙を発見し) ああ、ご苦労様です

四芙美 今月の評判はどうかしらね

五太郎 どんなの

四英美 ご近所の餅撒きで露呈する矢代家の醜態つてところ（台所へ）

六摘 見せてよ

五太郎 え

六摘 兄さんはそれ、一番最初に読めるじゃない。私読んだら怒られるの、見せて

五太郎 俺も読まないよ。活字になったって読まないね

六摘 どうして。気になるじゃない

五太郎 ならないよ、こんなの（退場しかけ）

四英美（七子の食事を盆に乗せ、戻る）あら、もう

五太郎 ・・・ 駅で新聞でも拾い読みするよ、いつてきます

四英美 あんまり外でみつともない事しないのよ。七子は起きていた

六摘 さあ。今日から学校嬉しいな、らんらん（退場）

四英美（溜息） 本当に若い子達は勝手なのだから

四英美は女部屋へ朝食を運びに。

入れ替わりに一要が寝ぼけ眼で登場、天突き運動をする。

と、大荷物を持つ三津子が鼻息も荒く登場。

一要 久しぶり

三津子 すいませんね、朝早くから

一要 構わないよ、

三津子 来るって手紙出したんだけど、出したら、もうすぐにでも向かいたくなくてしまつて、投函とほぼ同時に出発したわ。どちらが早かったのかしら

一要 俺は見えてない。でも、俺にだけ知らされていないのかもしれない

三津子 大変ね

一要 大変さ

三津子 読んだわよ、あの本

一要 そうか

三津子 なかなか巧く書けているじゃない、四英美

一要 そうみたいだね

三津子 何度も読み返して笑っちゃったわ

一要 そうか

三津子 まだ連載続けてるんでしょ。うちのがね、買ってるのよ月刊ホマレ。

知ってるんだか、知らないんだか分からないんだけど

一要 バレやしないだろう

三津子 そうよね。七子は

一要 可愛いおべべのまんまだ

三津子 そう

一要 変わらずだよ

三津子 そう。もう三年経つのに。これからどうするの

一要 四芙美次第だろう

三津子 そんなこと言って・・

四芙美が食器を持ち、戻ってくる。

四芙美 三津子姉さん

三津子 ごめんなさいね、朝早くに

四芙美 お手紙きたの昨日よ

三津子 しばらく厄介になるわ、向こうのお義母さんとやり合っちゃって

四芙美 え、ああ。そう。大変ね。でも、こつちも大変よ。最近双次兄さんのあれが酷いから

三津子 え、ああ。そう。あれね

四芙美 そうよ。でも三津子姉さんがいたら登場人物が増えて、喜ぶのじゃないかしら

四芙美は一人で笑う。

三津子 七子は部屋

四芙美 ええ、起こして朝ごはん済ませたところよ

三津子 荷物、女部屋で良いわよね。久しぶりじゃない、四人揃って寝るの

四芙美 ええそうね。懐かしいわ

三津子 運んでしまうわね

四芙美 私がやるわよ、姉さん休んでいて

三津子 主婦なのよ、体力には自信があるんだから

四芙美 私だって。ほら、お客さんの三津子姉さんは黙って座ってる。私に任せ
ておいて

三津子 お客さん

四芙美 余計な仕事増やされるより、のんびりしてもらった方がいいのよ

四芙美は笑って三津子の荷物を運び出す。

三津子 増長してるじゃない

一要 そう思うか

三津子 思うわよ

百子が手土産を持ち、登場。

百子 ごめんください

三津子 はい、どなた

百子 あ・・・こんなに朝早く申し訳ありません。五太郎さんか六摘さんか七子ちゃんか、双次さんいらつしやいますか

三津子 いるのかしら

一要 静かだから、五太郎と六摘は出ているのだろうさ

百子 そうですか、じゃあお二人にはこれ（手土産を差し出す）。双次さんは・・・

一要 もう起きて、本を読んでいたよ

三津子 あら、また読むようになったの

一要 最近ね、昔の自分の書き物なんかも読んでるよ

三津子 ・・・・

一要 ・・・・

百子 ・・・・あの

三津子 私達じゃ判断に困るのよ、ここの事

百子 ええ

三津子 出直してもらえるかしら

と、七子と四芙美が登場。便所へ行く途中のようだ。

四芙美 嫌だ

七子 百子さん

百子 七子ちゃん。約束通り、来てしまったの

七子 いらつしやい。嬉しい、嬉しいわ

四芙美 七子、お便所でしょう

七子 三津子姉さんも

三津子 おはよう

七子 おはよう。うわあ今日は素敵な朝ね。素敵な朝だわ

四芙美 どうも

百子 はじめまして。私、はす向かえに越して参ります幡多の百子と申します。
先日多田さんにご紹介を受けてまして、七子ちゃんと、五太郎さん六摘ち
やん、双次さんにはご挨拶を・・

四芙美 知ってますよ、私らちゃんと餅撒きに参加させて頂きましたから。それ
より、今何時だと思ってるんですか

百子 すいません。あの、気が急いたと申しますか・・あの・・

四芙美 兄弟の世話で、まだ私、朝食も済ませてませんのよ

百子 申し訳ございません

三津子 いいじゃない。ねえ、ご近所さんにそこまで言わなくたって

四芙美 いいえ、いくら多田さんのご友人だからって非常識だわ

七子 私、私は済ませたから、嬉しいわ。ありがとう百子さん

四芙美 お便所行くんでしょう、行ってきなさい

七子 ・・・・

四芙美 七子

七子 はい。でも、お便所行ったら百子さんと遊ぶからね

騒ぎを聞きつけてか、双次がいつの間にか覗いている。

三津子 あ

一耍 無視しろ。それが今のこの家の慣わしだ

四芙美 双次兄さんだつて、まだ

百子 いらつしやいますよ、そちらに

四芙美 ・・・何を仰っているのか分かりませんわ

百子 ほらそちらに

四芙美 (きよとんと)

百子 双次さん

四芙美 あ

百子 おはようございます。性懲りも無く、また再び来てしまいました

双次 ・・・こんなに早くから。何か急ぐ用事でも

百子 いえ。お恥ずかしい話ですが、用事という用事も無いのです。双次さん

は、今日は、お忙しいですか

双次 僕は本を読んでいるんだ、後輩からの借り物なので、早々に読み終えね

ばならない

百子 あら双次さん、どんな御本

四芙美 七子が戻るとまたうるさいので、お帰りになって頂けますか

百子 ええ、そうですね、ご無礼でしたわね

四芙美 また改めて・・・

双次 ・・・・「書記バードルビー」

百子 まあメルビル

双次 知っているんだ

百子 でも随分とお暗い短編を選ばれたわね、その後輩さん

双次 暗いがしかし無気力対博愛とは、なんとも愉快だ

百子 ええ、あの本は色々な視点から興味深いわ

双次 こりゃあ驚いた

百子 私もです。上がって、お話の続きをさせて頂いても良いかしら

三津子のみ、ぎよつとした表情をする。

双次 散らかってますよ

四芙美 兄さん

双次 どうぞ

百子 ありがとうございます

四芙美 待って下さい

百子 ・・・・駄目でしょうか

一要 腹が減ったよ、四芙美

三津子 なにか用意してあるのかしら

四芙美 しているに決まっています。もう、三津子姉さんたら、いつまで

も小さな妹扱いなんだから

三津子 そうよねえ

双次 おいで

百子は。ぺこりとお辞儀をし、双次の後へ付いていく。

七子が戻ってくる。

四芙美 ああ

七子 百子さんは

一要 双次の所へ行っちゃよ。お前も行くか

七子 うん

四芙美 ちゃんとして、どうして皆乱すのよ

一要和七子も男部屋へと。

三津子 四芙美

四芙美 眩暈がするので、少し休みます

三津子 そう。眩暈と言えば、あの本読んだわ。売れてるんですってね。いい名前付けじゃない、眩暈のある徘徊

四芙美 姉さんは覗かれないからそんな気楽に言えるのよ。私達の身になって考えれば、そんな笑顔で言えるわけがない。今日だって本当はお金の無心に来たのでしよう

三津子 なんて事を言うの

四芙美 一人でさっさと逃げた事、私許してないんだから

三津子 なら、あんたも逃げればいいじゃない

四芙美 皆を置いていけるわけがない

三津子 あなた自分が縛られてるって言いたいの

四芙美 姉さんは分かってない(退場)

取り残される三津子。一人憤慨している。

七子が餅を持って笑顔で登場。

七子 あれ、四芙美姉さん居ないの

三津子 頭が痛いから寝るって

七子 そう

七子は男部屋へ戻り、部屋の皆を連れて戻って来る。

七子 こっちで食べよう

三津子 あら、お餅

百子 昨日餅撒きだったんです

一要和 三津子、頼むよ

三津子 はいはい

一要和 (七子へ)座ってる

七子 お手伝いするよ

百子 私がします

女性陣はきやいきやいと台所へ

七子 じゃあ一緒に

一 要 昔みたいだな

双次 うん。昔のようだ

一 要 懐かしいな

双次 そうかな

一 要 お前は満足しているのか

双次 兄さん、板についてきているよ

一 要 半分本物だ

双次 七子はどうする

一 要 ……

双次 七子ももう子供じゃないか

一 要 でもなあ

双次 そうか。兄さん戻りたいんだ。じゃあきつかけを作ってやろう。……

百子さんて、可愛いよねえ

一 要 ……そうか。それは良かった

女性陣が餅を皿に盛り、きやいきやいと戻ってくる。

一 要 焼かなかったのか

三津子 お餅じゃなかったの、すあまだったのよ

百子 ごめんなさい、早とちりしてしまって

七子 甘くて美味しいから、私はこっちの方が好きよ

百子 ありがとう

一 要 いただこう

皆ですあまを食べていると、溝馳がやって来る。

溝馳 にぎやかですね

双次 (すあまを頬張っているのので聞き取りにくい) おお、あがれあがれ

溝馳 何かのお祝いですか

双次 (同右) 祝いと言っちゃ祝いだが、まあ気にせずあがれ

溝馳 七子ちゃん部屋じゃないの珍しいですね

一要 (溝馳を一瞥し)

三津子 どなた

溝馳 あ、双次先輩の、後輩で溝馳、と申しますー

双次 小説貸してくれた奴さ

百子 溝馳さんご趣味が良いわ

溝馳 読んで下さったんですか、感激です、吉報だなあ、伺って良かった

双次 まだ一冊目だよ

溝馳 いやあ、嬉しいなあ。先輩のガールフレンドですか

百子 (真っ赤になりうつむく)

双次 君は本当に無粋だな

溝馳 ああ、浮かれてしまつて。すみません

双次 結婚相手だ

七子 え

一同が双次の顔を見る。

双次 ……こんな風に、皆から見られる事も久しぶりだ

百子 双次さん

双次 あれ。そういう気じゃなかった

百子 いえ、ですけど、あの…

一要 双次

三津子 なんだ、それならそうと言つてくれたら良かったのに。さっきは失礼な

物言いしちゃったわね

百子 あの…

溝馳 これは失礼しました、ガールフレンドなどと軟派な呼び方をしてしまつ

て

一要 馬鹿かお前は

双次 いいきつかけだろう、ね

溝馳 やはりね、作家たるもの妻の一人も抱えるべきです。先輩のような天才

には尚の事、日常の些事を担う協力者が必要ですよものね

三津子 具体的なお話は決まっているの

百子 そんな滅相も、昨日お会いしたばかりで

双次 近いうちにしましょうね

百子 ええ、…いえ、あの、でもそんな

三津子 そうよ早い方がいいのよ、こういう事は、思い立ったがってね

七子 じゃあ百子さんは、私の新しいお姉さんになるのね

百子 え、そうかもしれないわね。でも、双次さん

溝馳 めでたい。今日はめでたいですな、先輩

双次 めでたいついでに、もう一つ吉報を聞かせてやろうか

溝馳 なんですか

双次 小説を書こうと思うんだ

三津子 え

一要 (立ち上がる)

双次 もう日記を書いたり、閉じこもる事にも飽いてしまつてね。僕は小説を

書こうと思う、また昔のように。書きたい事があるんだ、やっと見つかった

また一つ吊り雛が増える。音楽。

段に上がり、取り出した原稿用紙に筆を走らす双次を残して皆退場。

時間は同日の夕方へと移り変わる。

飛び込んでくるのは五太郎と六摘、一要与三津子も集合する。

六摘 どういう事

一要 どうもこうも

三津子 突然皆の前で宣言したのよ

六摘 じゃあどうなるの、眩暈のある散歩は

三津子 あら、そんな名前だった

五太郎 四芙美姉さんは知ってるの

一や いや

五太郎 どうするの

六摘 万事解決じゃない

三津子 そうよねえ

六摘 これで覗かれずにすむわ

一や 四芙美が、がっかりするな

六摘 一番嫌がってたの、四芙美姉さんよ

三津子 それなら万事解決じゃない

五太郎 連載打ち切りか。怒鳴られるなあ

六摘 その、新しい小説つてのを載せればいいじゃない。実は仮面作家でしたって

五太郎 そしたら双次兄さんに眩暈のある散歩が知れるよ

六摘 いいじゃない、自分の日記が人気作だったなんて驚くわ

五太郎 驚きついでに家を出る

一要 そうだな

三津子 それはいけないわね

五太郎 俺の稼ぎじゃ、とても足りないって分かっているだろう

六摘 分かっているけど・・・いいじゃない、私も卒業したらきちんと働いてお給料を家へ送るわ

五太郎 何して稼ぐんだよ

六摘 双次兄さんの秘書よ

五太郎 安易だなあ

六摘 それに私が傍にいたら、双次兄さんきつと題材に困らないと思うの

五太郎 目立ちたがり屋め

六摘 黙っててよ

三津子 もういいんじゃない

一要 なにが

三津子 四芙美と七子が一緒にいれば。あの二人はやめないでしょう

四人が沈黙していると、四芙美が目覚めて登場。

四芙美 随分長いこと眠ってしまったわ

一要 ああ

四芙美 なあに、皆揃って

六摘 双次兄さんがね、小説を書くって

四芙美 え

六摘 そう宣言したらいいのよ。ねえ

三津子 そうなのよ。あのはす向かいの百子さんは結婚相手だって言い出して、

吉報は小説を書く事だって。続けざまに

四芙美 ごめんなさい。三津子姉さんの説明じゃ理解が出来ないわ

一要 概ね正しいよ

五太郎 打ち切りだね。あーあ。それだけが残念だよ。もつと前に知ってたかったな

四芙美 だからって、ねえ双次兄さんが小説を書くからって、日記を止めるとは

言っていないわけでしょう。そんなにすぐ打ち切りだなんて残念がらなく

ても、ねえ、分からないじゃない

六摘 姉さんは覗かれていたいの
四英美 いいえ、誰もそんな事は言っていないでしょう
六摘 名残惜しそうに見えたから
四英美 嬉しいわよ、肩の荷下りてせいせいだわ

双次が兄弟達へ視線を移す。
全員がその視線に気付く。

四英美 ほら、一要兄さん、三津子姉さんが久しぶりだからって、あんまり無理
しちや駄目ですよ。お部屋戻りましょう

一要 あ

四英美 六摘

六摘 ・・仲良しね、私達

四英美 五太郎

五太郎 久しぶりに兄弟揃うなんて、嬉しいな

四英美 私もみんなが楽しそうで嬉しいわ

六摘 もうやだ

三津子 ねえ、双次兄さんもこっちいらしたら

四英美 あ

一要 三津子

六摘 そうよ、お兄さんいらつしやいよ

四英美 ああ

一要 四英美、俺も、働きに戻ろうかと思うんだ

四英美 え

双次 凄だね、兄弟集合だ。七子も呼んだら

六摘 小説書けた

五太郎 今度のはどんな話

双次 秘密だ

三津子 また推理探偵物かしら

双次 一つの話してるんだい

三津子 私は好きだったのよ

六摘 懐かしいわ、私も覚えてる

五太郎 まわし読みしたね

双次 お前達と話してたら、過去の自分に足を引かれる。僕は集中するよ、
はね

四芙美 結婚

双次 するよ、百子さんと。多分ね

双次は再び視線を外へと。

三津子 なんだ、普通に話ができるじゃない

一要 ああ

五太郎 夢中で読んだよな

三津子 貴方達は双次兄さんのおかげで漢字を覚えたようなものだしね

六摘 面白かったもの

五太郎 面白かった

三津子 ね、あの眩暈よりもずっと

六摘 懐かしい

五太郎 でも読みばかり覚えて、書きは上達しなかった

六摘 そうそう

四芙美 一要兄さん、働きに戻るだなんて無茶言わないで

一要 無茶では無いさ。俺はお前が思っているより回復している

四芙美 部屋の中まで靴を履いてあがる人が

三津子 そうなの

四芙美 日がな壁ばかり眺めている人が、どんな職に戻ると言うの。兄さん、気を確かに持って

一要 ごめんな四芙美、今まで甘えてしまつて本当に申し訳ない

四芙美 いいのよ、兄弟じゃない。無理して外に出られるより余程・

一要 楽は良いもんな。辛いより、楽の方が良いにきまつてる。楽だろう、そ

りや。働かずに、人とも口をきかないで。雑多の面倒事から逃れられるじゃないか、なあ。病気と言つてしまえば。免罪符だ。双次の日記をお前が読んで、それ出版しようと言つた時に、言っただろう。これぐらいおかしな話ならばきつと良いわつて。おかしい。肯定されたようで嬉しかったよ、安心した。俺はおかしくて構わないんだと。むしろもつとおかしい方が、より面白くなるんじゃないかとまで考えた。しかしな、今はそれを否定したいんだ、四芙美。俺はおかしくなんか無い。もう戻つた。これからは家長として責任持つて働く。だからお前ももう、もう

四芙美 (笑い出す) 分かった、分かったわ
一要 そうか

四芙美 何を突然言い出すかと思えば、そんなおかしな事を。ああおかしい。は

あ。．．．そんなにすぐ判断は出来ませんよ。でも兄さんが治ったと言うなら、妹の私はそれを信じるより他ないでしょう。分かりました。兄さんを見守るわ

一 要
．．．．．

五太郎 じゃあ、俺も禁酒してみようかな

四英美 (笑い出す)

三津子 四英美

六摘 じゃあ、私、私も。五太郎兄さんの会社で働かせてもらおうかしら。学校が終わってからだけ。見習いの雑用でいいの。私、双次兄さんを担当する編集者になりたいの

四英美 そんなに甘い物じゃないわ

五太郎 本気だったら、紹介してやらない事もないけど

六摘 してよ。早いに越した事はないわ

三津子 あら。じゃあこれを機に私も何か始めようかしらね

四英美 何を

三津子 そうね．．．編み物とか

四英美 編み物

三津子 私ね妊娠しているのよ。三ヶ月目ですって。やつとよ、嫁いで四年目でやつと。なのにこの子の出産の話でお義母さんとやりあっちゃって。もう私、実家で産みますって啖呵を切ってしまったわ

六摘 嫌だ、三津子姉さんが子供産んだら、私叔母さんって呼ばれちゃうわ

四英美 あははははは、おめでたいじゃない

三津子 だから編み物、靴下とか、ね

一 要 馬鹿。帰りなさい

三津子 ここは意地の張りどころよ

四英美 みんな良いじゃない。色々試してみたら良いわ。それはとても大切な事だもの、うふふ。あはは

三津子 もう登場人物としての役柄を気にしなくて良いんですものね

四英美 (うなづく)

六摘 じゃあ、四英美姉さんは何するの

四英美 私は何もしない

六摘 ん

四英美 何もしないわ。今までしてきた全てをやめる。やめる事をするわ。皆好き勝手な事言ってますけど、私が今までどんなに貴方達の事で苦心してきたと思っているの。それなのに、まあ自分勝手だ事。どうぞご自由に。

お手並み拝見といこうじゃないの

三津子　なんて言い方するのよ、四芙美

四芙美

双次兄さんだって、すぐに挫折するかもしれないじゃない。ちよつとやる気を出せば出来る事だったのなら、何故今まで出来なかったのかしら。ああ楽しみだわ。やつと皆が私がつてきたように、ちゃんとした生活を営んでくれるのでしょうか。ああ楽しみ、楽しみだわ

笑い続ける四芙美。怪訝な表情の兄弟達。

双次の傍に七子の姿が見える。

双次　観察者は、謙虚でなければならぬ

暗転。音楽。

第一幕終了。

第二幕。

熱弁をふるうハツカの姿が見える。

ハツカ　そんな風に仰いますが、文学作品においてその作品が自己弁護の側面を持たぬもの等ありません。それは人生そのものが自己弁護、自己肯定の性質を持つからです。ああこれは森鷗外先生の受け売りで、私なりの解釈で申しますとね、人と人との営みを描き、その営みを通し読者へ問いを投げかける物が文学ならば、文学とは作家の人生そのものです。日本の作家が海外の物語を書こうが、或る一本の樹木を題材にしようが、そんな事は関係ありません。つまりですね、作家の脳味噌が筆を走らせるのであれば、その脳味噌が知る経験、今まさに体験し続けている人生が反映されぬわけがない。生きる人間の筆からは、人生賛歌の言葉しか生まれない。生きる人間に死人の言葉は決して書けない。例え読者に深い死を意識させようが、とこういう話です。もつと噛み砕いてご説明さしあげますとね、作家がイタコで無い限り、イタコ、その文学は作家その人に根付いた文学であるとそういうわけです

ハツカの正面には三津子と四芙美の姿が。ハツカの土産の茶菓子置きが置かれている。近所の犬が吠えている。

三津子 最後のだけ、分かり難かったです

ハツカ イタコご存知ないですか

三津子 そうじゃなくて

ハツカ ああ、それにあれですよね、悪質な同人や雑誌社が混濁してますものね、夢追いの放浪者のなんと多い事か。清貧。美しい言葉ですね、清貧。清く貧しい。しかし貧しい事に変わりは無いのです。その点、私共請願社は、ええご家族の安心に足る出版社だと自負しております。私共は矢代さんの才能を死後の遺産としたくはありません。我が請願社が責任を持って矢代さんを名代の大文豪にしてみせます。いえ、させて下さい。どうかお手伝いさせて下さい。矢代双次さんを、矢代双次先生と呼ばせて下さい

四芙美 (面倒くさげに仰け反る)

三津子 私じゃ分かり難いので、また後日改めて

ハツカ 双次さんを東京へ連れ参るまで、帰られませんか

三津子 でも、あの、兄がいつ戻るかちよつと私には

ハツカ ご本人の承諾も頂いています。私からこうして、四芙美さんの説得をしてほしいとお手紙頂きました (封書を取り出す)

四芙美 (封書を奪い、手荒く千切る。)

ハツカ あら

三津子 それならいいじゃないですか。ねえ四芙美

四芙美 なぜ私に伺いを立てるんです。子供じゃあるまいし。私より上の兄弟もおりますのに。もういいでしょう。聞くだけでも疲れるのよ

ハツカ ……

四芙美 (移動しようとしていたが、ハツカに笑顔を向ける。)

ハツカ あ、あ、ああ。ありがとうございます。日本文学の新しい夜明けです。

お水を一杯頂戴できますか

四芙美 あああ耳障り

三津子 兄をどうぞ宜しくお願い致します

ハツカは慌てて退散する。

四芙美は七子の横で、ぐったりと寝転がる。

三津子 四芙美。あの態度は何、姉さん恥かいたじゃない

ぶつぶつと三津子は退場。

俊介が静かに登場する。

七子は俊介に気付くが、四芙美は無関心なのか気付いていないのか。

俊介　ごめんください

俊介は家を物色し始める。

茶を持った三津子が俊介と鉢合わせ。

三津子　あら

俊介　どうも

三津子　あら

俊介　あの

三津子　どうぞどうぞ

三津子は俊介に茶菓子をすすめ、お茶の準備を始める。

俊介もされるがままに茶を飲んだり茶菓子を食べたり。

五太郎が帰宅する。

五太郎　参ったよ、兄さん請願社に決まったんだって

三津子　さっきいらしてたわよ

五太郎　早いな。ああ、どうも

俊介　お邪魔しています

五太郎　こっちで手配してたのにさ。悔しいな。兄さんも兄さんだよ、そんな話があったなら最初に相談してくれたら良かったのに。恥かしいやつた

三津子　私も東京のその、出版社さん相手にかいちゃったわ、四芙美のおかげで

五太郎　そう。仕方ないんじゃない

三津子　そうね困り者よねえ。でもあんたのどこ田舎新聞だからねえ、それより向こうでちゃんとして貰った方が、兄さんもあれなんじゃないの。大文

豪にって息巻いてたわよ、担当の人

五太郎　大手だからね。そりや俺のどこより良いだろうけど・・ちえ。眩暈の事

さえ言えりや、恩返しでって押し切れたのに

三津子　駄目よ、あんな事知ったら逆戻りじゃない

五太郎　おかえり

一要在洋装で帰宅する。

一 要 ただいま。ああどうも

俊介 お邪魔しています

五太郎 うまいよ

一 要 取引先で散々食べさせられた、奥さんの手作りだとかでおはぎ

三津子 太るわね

一 要 丁度いいだろ（一升瓶を持ち出し、晩酌を始める）

三津子（茶を飲み干し、一要到茶碗を向ける）

一 要 馬鹿、身体に触るだろう

三津子 迎えにこない男の子供なんて、飲まなきや産んでいられないわ

五太郎（酒への誘惑を菓子で遮断）

俊介（も、茶碗を向け）

一 要 やりますか

俊介 …分かりますよ。非礼には無礼で返さなきや

三津子 ね、目には目ですよ

皆は笑い合うが、矢代家は俊介が誰だか分からない。

六摘が書類束を持って帰宅。

六摘 五太郎兄さんズルいわ、一人で先に帰って

五太郎 新人は仕事を覚えるのが仕事

六摘 もう。あ、どうも

俊介 お邪魔しています

六摘 やだ（身なりを気にして、部屋へ移動）

五太郎 年頃だねえ

矢代家は俊介を見て笑う。俊介は笑わない。

六摘は身なりを整えながら四芙美に問う。

六摘 姉さんも来たら。お菓子あるわよ

四芙美 知らない。東京のお菓子ってべたべたして口に合わないもの

六摘 七子行く

七子（四芙美の顔色を窺い）いや、いい

六摘 そ

六摘が戻ると四芙美が居間を凝視している。

七子 お姉ちゃん

四芙美 なによ。こうやって監視していきや、あの人達はいつどんな失態を
でかすか知れないでしょう。嫌だもの、私の知らないうちに恥をかくの
は

機嫌の良い溝馳と、腕を組む双次と百子が帰宅。

溝馳 仲睦まじき事は良き事かなですよ

双次 ただいま。あれ

矢代家が俊介を凝視。

うきうきしている六摘が浮いている。

俊介 何やってんだ姉さん

百子 ・・俊介・・

三津子 あら、百子さんの

一要 ああ

五太郎 あ、それで

六摘 俊介さんて仰るのね

俊介 ろくに家にも戻らないで、何をしているのかと思えば。帰るよ

百子 (首を横に振る)

俊介 誰だこいつ

溝馳 先輩に向かって、なんて物言いだ

双次 俊介君、百子さんの弟ぎみだね

俊介 はい

双次 はじめまして。百子さんと結婚する矢代双次です。わざわざ出向いても
らって、ありがとう。僕の方からご挨拶にと思っっていたんだけど

俊介 (双次の胸ぐらを掴む)

溝馳 あああ

百子 やめなさい俊介

俊介 実写版、眩暈のある散歩だろ

百子 え、なに・・

俊介 眩暈のある散歩。聞いたよ多田君に。あのキチガイ小説、そのまんまこ

の家なんだろう。ねえ、そうですね。そんな所に人の姉さん預けられるわけ無いじゃないですか。あの人、馬鹿だね、多田君。嬉々として僕に報告してくれて、姉さんとの変態小説家の恋仲。はっ、恋仲。口にするのも腹立たしい。自分の家族の観察日記を人様に売するような男とえ

溝馳
六摘
あれは大袈裟に

俊介
君はあれか、野心溢れる自己愛陶酔の三女でしょう

六摘
そんな、だからあれは大袈裟に書いてあるだけです

双次
眩暈のある散歩

一
まあちよつと

五太郎
その話なら、また後で

俊介
神経薄弱の長男、変態覗き作家の次男、アルコール依存症の三男、貴女は家の事に口出しはするが嫁いだおかげで災難を免れてる長女ですか、えつと、あと二人足りないね。自室に籠ってるのかな、悶々と。ねえ、小説通りだ

溝馳
水臭いじゃないですか、こりやあしてやられた驚いた

双次
なかなかの題名だ

溝馳
名演技だなあ

六摘
・・・でも、でももう違うんです。もうあの頃の私達ではないわ。読んだのならご存知でしょう、私たちの両親が失踪してしまった話。辛かったんです。皆動揺してしまっただけです。ほら、見て下さい、今の私達ったら、ちゃんとしてるでしょう

俊介
フリをしているだけでしよう、マトモなフリを。第一、本当にマトモな人々なら見知らぬ男を家に上げて茶菓子など奨めたりしません

三津子
それは、見ての通り兄弟が多くて人間関係を把握しきれない場合があるから・・・

俊介
ご馳走様でした

三津子
お粗末様です

一
誤解があるようですね

俊介
誤解だったならばどれ程いいか（小説を取り出す）

五太郎
あ

俊介
これのどこが誤解で、どれが真実なんですか

双次
（俊介から小説を受け取り頁を開く）さて、どの辺りでしょうね

俊介
姉さん、帰るよ

百子
私は双次さんが好きよ

俊介 なぜ僕に告白するの、驚くだろう
百子 私が知る限りで、こんなに聡明で、頼りになる男性他にいないわ

双次以外の矢代家の皆も歪んだ笑いをする。

溝馳 同意見です

百子 なあに、この二本

双次 なかなか興味深い内容だよ

俊介 白々しい

双次 ・・・四美美の部分だけ、大幅な改訂がほどこされている

六摘 やっぱり

俊介 家族会議は他人がいない時と場所でお願ひします、姉さん、離れて

百子 双次さんは、これから大作家になる有望な小説家なのよ。東京行きも決まっているの、尊敬に値する人だわ

俊介 姉さんは変態小説家の妻になりたいの

百子 変態だなんて。私をモデルにした純文学よ

溝馳 僕も拝見したがなかなかどうして。何年も筆を休めた、あ、純文学を離れた作家の作品とは思えない、素晴らしい出来栄えです、主人公の百子さんがねえ・・

俊介 純文学だろうが関係ないよ。姉さんが書かれる事が問題なんだ。他人から見れば架空でも、僕ら家族は実在している。自分の姉の私生活を赤裸々に書かれて、良い気がする人間がどこにいるって言うんです。たとえ姉さんは平気でも僕らが堪らない。だから許さない、身内の恥を露呈するような付き合いは認められない

三津子 正論ね

矢代家は声をあげて笑う。

俊介 茶化さないで下さい。ほら、こんな風に人を馬鹿にする家の仲間入りし

たいって、姉さんはそう言うの

百子 失礼なのは俊介、貴方よ。私は承知しているし、むしろそれを喜ばしく思っているわ

五太郎 大丈夫大丈夫

六摘 百子さんて、案外良い人ね

一要 うちには、自尊心とか、そういうのありませんから

三津子 やだ兄さん。あはは

溝馳 君はね、双次先輩の偉大さが分からない阿呆者だよ。弟として、君ももつと胸を張らなくちゃ

俊介は頭に血を上らせ溝馳に掴みかかる。

俊介 お前はいったい誰だ

六摘 まるで、最初の頃の私達のような

双次を残し、矢代家は笑う。

五太郎が俊介を制し、俊介は一升瓶で酒を煽る。

四芙美 ねえ七子、姉さんが今、皆の仲裁に出ていけば、この問題は解決すると思うんだけど、やめておこうとも思うの。その方が、私の有難味、皆に分かるでしょう

七子 姉ちゃん

四芙美 お客さんが怒ってるのに、笑うだなんて

四芙美は原稿用紙を取り出し、現状を記す。

七子 あ

四芙美 六摘はあの男の子にも媚びるのかしら

七子 姉ちゃん

四芙美 誰が忘れたって、あんたの事は私が守ってあげるから安心して

多田が登場する。

四芙美は筆を置き、身づくろいを始める。

多田 勢ぞろいだ

三津子 どなた

一要 多田君だ

五太郎 百子さんとの仲人

三津子 ああ、ふうん。お茶

多田 いえいえお構いなく

俊介 多田君、君には感謝しなくはいけないね

多田 やめてくれよ、そんな改まつて。僕もまさかこんなに上手くいくとは思
つていなかったんだぜ

俊介 幡多の家まで世間様の笑い物にさせて頂けるなんて、ありがたくて涙が
出るよ

多田 ……急に兄弟の数が増えるからって、恥じる事はないぞ

俊介はおもむろに百子の腕を引き、強奪するよう駆けて退場。

百子 あ、ちよつと、俊介

双次 百子さん

三津子 まあ

六摘 直情型の男性なのねえ。素敵だわ、男らしくって

五太郎 まだ言ってる

一要 なあ

多田 姉さん子なんですよ

笑う矢代家だが、意気消沈している。

双次 眩暈のある散歩

双次が小説を開いて読んでいる。

兄弟達は目配せをし、六摘が小説を手荒く奪う。

双次 良い名前付けだ

六摘 私達の家に、よく似た内容だから、皆勘違いするのよ、ねえ

双次 僕は、僕らを笑い者にする為に日記をつけていたわけじゃないよ

四芙美が筆を振り上げる。

四芙美 遂にバレてしまったわ、双次兄さんにバレてしまった。どうなるの、ど
うなるの七子

興奮しながら書き記す四芙美。

六摘 でも、結果的に、家族は潤ったのよ。家計はねえ

五太郎 出版までこぎつけるの、苦勞したんだぜ
一 馬鹿のフリまでして
三津子 私だって、毎日ひやひやしていたわ
六摘 大袈裟
三津子 大袈裟なもんですか
五太郎 苦勞の割りに、食卓は貧相だったけどな
一 要 あからさまはいかんだろ
六摘 私たちも嫌な思いをした、それでおあいこでしょう
一 要 養い合ってたって話でもある
五太郎 俺の稼ぎも忘れないでよ
双次 謝りもしないんだね

兄弟達は口ごもる。

双次 でもまあいいや。書き終えたものに興味は無い
三津子 なら、双次兄さんから私達に謝らなきゃ
双次 なぜ
三津子 ずっと、覗いていたでしょう
双次 ・・僕らは互いに覗き合っていたのだね
多田 そうか、とうとうバレてしまったのか
双次 知っていたんだ
多田 ああ。四美美さんから聞いていた
双次 どう思った
多田 どうもこうも。循環のある、よく出来た家族だと思ったよ
双次 よくできた家族
多田 そうだろう（封書を渡す）
双次 君から直接貰うの、久しぶりだ
多田 いつも四美美さんが先に開けていたからね
双次 そうなの
多田 尻の方を切って、後で糊付けして渡してた
双次 まったく、上手く出来た良い家族だ

四美美は自分の書いた原稿を高らかと掲げ読む。

四美美 じゃあ、今はどんな家族かしら

音をたて更に吊り籠が増える。完成形だ。
暗転。

他に誰も居ない家にて、四芙美が七子の独白を書き記している。

七子 忌まわしいのは鮮やかな、あの赤い陽の血の匂い。私に零れぬあの赤を、羨む心が忌まわしい。なろうなろうと着飾れば、届かぬ想いも身を隠し。なろうなろうと泣き濡れ・泣き濡れてもいなくせにねえ。お姉ちゃん、もう言葉がないよ

四芙美は無視だ。延々と書いている。

七子 語る言葉は戯れの、幼子姿の鏡越し・お姉ちゃん、もう私も出て行きたいよ

四芙美 それから

七子 出て行きたいよ

四芙美 それから

七子 ・・・・

四芙美 それから

七子 百子さんに会いたいなあ

七子が口を開くと、四芙美は原稿用紙に飛びつき書き記す。

四芙美 安定は、物語の終わりなのよ。何も起こらない物語など、ありはしないでしょう。でもね、何も起こらなかったのよ、おかしいわね、何も解決していないはずなのに終わってしまったんだなんて

四芙美は男部屋へ行き、双次の日記帳を探す。

見つからない。屑籠に投げ入れられている日記帳を発見。

四芙美（叫び声）ああ、家族の、私達の日記が、記録が

四芙美は日記帳の中身を確認し、瀕死の形相で、七子の元へ戻る。

七子 どうしたの

四芙美 捨てられていたのよ、私達が。私達の生きてきた今迄がゴミの様に打ち捨てられていた。・・無い、続きが全く無い。双次兄さんたら、あの日から全然書いていない、真つ白、私達が無い。駄目よ、駄目、無くなるのは駄目。どうしてそんなに落ち着いていられるの

七子 だって

四芙美 だって。だって何

七子 ・・四芙美姉さんが書いてくれるから、大丈夫

四芙美 そう。そうよね。私は全てを放棄すると言ったのに、まだこうして皆の為に書き続けている。お人好しにも程があるわ

七子 百子さんは私を

四芙美 お人形だなんて呼ばれるうちは、外へなんて出られないからね

七子 うん

四芙美 ほら、ここから私達は消えている。あの女が家に乗り込んで来た日よ、厚かましい。あの凶々しさに私ら兄弟は蹴散らされてしまった

七子 百子さん

四芙美 みんな、どうして我慢できないんでしょう。血をわけた兄弟さえ大切に出来ないのに、何故外へばかり目を向けたがるのでしょうか

六摘が帰宅し、書類に目を通し始める。

四芙美 午後八時十五分、三女帰宅。職業婦人に憧れてみせるのも、男の目を引く為の演技にすぎない

三津子と一要も続いて帰宅。2人は食事をしてきたようだ。

三津子 あら、感心ね

六摘 気付いたのよ

一要 何に

六摘 視線なんてものは、外に出れば嫌っていうほど浴びられるって事

三津子 会社で人気者なんでしょう

六摘 そんな事ないわ

三津子 いい男性、いれば良いわねえ

六摘 いやあね姉さんたら下世話だわ

四芙美 産婦人科にでも行つてたのかしら。旦那さんが居ないから、一要兄さん

に付き添いしてもらって。恥ずかしい

三津子 ・・はあ。お腹いっぱいよ

六摘 美味しかった

一要 なかなかだったよ

三津子 前だったら、真っ先に六摘が「連れてって」って手を挙げたものなのに

六摘 これ、読んでしまったかったんだもの

一要 今は何の仕事だ

六摘 双次兄さんがね、出版はやはり請願社だが随筆くらいならって、試し書

きしてくれたの。来月の地域版に押し込んでしまおうと思っ

一要 もうお手伝いの域じゃないな

六摘 卒業を待たずに就職してしまいたいわ

三津子 また、あんたは

六摘 ふふ

七子 お姉ちゃんに作ってもらえなくなったからだよ

四芙美（大きく頷き）じゃあ作ってあげてみようかしら

四芙美が日記帳を持ったまま段の一つに移動し、座る。

が、誰も四芙美を見ようとし

耐え切れず四芙美は一要と三津子がいる段へ移動する。

一要 四芙美

四芙美 なに食べて来たの

三津子 タンメン

一要 駅前に中華料理屋が出来ただろう

四芙美 知らない。そう

一要 お前も出てみれば良いじゃないか、もう家族の世話をする必要も無いのだから

四芙美 ご飯、作ってあげようか

三津子 いいわよ

四芙美 嘘、本当は足りないでしょう、もう姉さんたら仕方ないんだから

三津子 いら

一要 俺の働いている保険屋で、経理の女の子を募集しているんだ

四芙美 ふうん

一要 お前も働きに出てみればどうだい

四英美 あはは

三津子 出たら良いじゃない。このままだと四英美、あんた自分が嫌っていたお荷物と変わらないわよ

四英美 私はお兄さん達を嫌ってなんかいなかったわ。三津子姉さんたら酷い物言いね、私は大切に思っていたわ

三津子 不思議だわ

四英美 本当よ

三津子 私は今のあんたを大切になんて思えないわ

四英美（仰天して日記帳に記す）長男を夫と偽り産婦人科に通う、惨めな長女のやけっぱちさを見かねた次女の心配りも、彼女にとつて八つ当たりの標的でしかなかった

三津子 ご飯食べに行っただけよ

一要 もうすぐお別れだからな。懐妊祝いもしてやってなかったし

四英美 私を働かせて、今度は何をさせようって魂胆

一要 ただただ労働だよ

四英美 していたじゃない、私

一要 俺達と同じ労働だよ

四英美 だから、してたじゃない。奪ったのは兄さん達よ。それより毎日丈夫に過ごせているの、誰かに責められる声を聞いたり、笑われたりしてないあい、人と話すより壁とのお喋りの方が楽しいって思い出したり、またあの時のように全ての責任を放り出したくなったりしてないなあ

一要 （茫然自失とする自分に気付き、首を横に振る）

四英美 やつぱり・（日記に記す）長男はやはり対人関係がうまくいかず、仕事を辞めなければならぬようだ

三津子 やめなさい。もう、構ってられないわ。行きましょ

一要 ・・仕事の事、考えておくんだぞ

四英美 自分の空けてしまった穴を次女に埋めさせる手筈なのだ・・

一要 三津子と入れ違いに五太郎が帰宅し自分の段へ。

四英美 おかえりなさい。まだ足りないでしょう

五太郎 なにが

四英美は一升瓶を取りに行き、五太郎の前で飲んでみせる。

五太郎 やめなよ。みっともない
四芙美 五太郎もやってきたんでしよう
五太郎 もうしばらく飲んでいないよ
四芙美 (酒に気分を悪くする)
五太郎 無理しても、誰も同情しないよ

五太郎は溜息をつき退場。

四芙美 (日記へ記す) 再び酒に溺れている事は、兄弟に内緒にせざるを・・

六摘がちらりと四芙美を見る。

四芙美は女部屋に戻り、髪飾りを持ち六摘の元へ。

四芙美 はい、あげる

六摘 なあに

四芙美 髪飾りよ。六摘に似合うと思って。好きでしょう、この色。華やかだから貴方にぴったり

六摘 ありがとう

四芙美 つけてごらんさいな

六摘 え

四芙美 ほら

六摘 うん (渋々髪飾りをつける)

四芙美 可愛い。そんな貴方に、みんな夢中になってしまうわね

六摘 そう、ありがとう (髪飾りを外す)

四芙美 どうしたの

六摘 会社に、こういうのつけて行きたくないの

四芙美 どうして

六摘 はしゃいでいると思われたくないもの

四芙美 はしゃぎなさいよ、若いのだから

六摘 お出かけの時につけるわね

四芙美 お出かけの時に作ったのに。六摘、そんな物置いて、ちゃんとこつち姉さんがせっかく作ったのに。六摘、そんな物置いて、ちゃんとこつちを見なさい (原稿を奪う) 今まで誰が、どんな思いで世話してやってきたと思うの

六摘 やめてよ

四英美 自分の事はかり考えて

六摘

・・・こんなに嫌なのに、四英美姉さんの言う事を聞き続けてきた理由、教えてあげる。私は四英美姉さんを可哀相だと思っていたからよ。私ら兄弟の中で一番可哀相な人だと思ったから、従っていたの

四英美 あんた妹でしょ

六摘は強引に原稿を奪い退場。

四英美は髪飾りを拾い、七子の元へ戻り彼女へつける。

四英美 ・・・・泣き虫だったのにねえ

七子 ありがとう

四英美 もうすぐ出来上がるからね

四英美は女部屋奥へ日記帳と原稿用紙を持ち退場。

七子は、嗚咽のような、嘔吐の前の動作だ。眩き。

七子

紙に書く、のは、声にする、だけでは足りない衝動が、あるから、でしょう。二つ上の姉は、狂ったものではありません。あれが姉の本来の姿です。いいように、担ぎ上げられた、者の哀れです。担いだ人は忘れず、何を乗せたか忘れます。神輿が落ちて壊れても、担いだ事を忘れているのだから、壊れる意味が分かりません。壊れた者を非難するだけ。なぜ壊れる、乗せたから。それにすら気付かぬ、いい家族です。乗せ合いい落とし合う、いい家族です。私は決して落ちません。私を担いだ全員が、忘れている事に気付いているからです

多田が登場する。

多田 こんばんは

誰も返答をしないので、我が物顔で部屋を動き回る。
すると俊介が登場。

俊介 こんばんは

多田が玄関まで俊介を迎える。

俊介 留守番ですか
多田 いや、誰も居ないみたいで
俊介 なんでもありだな、この家は
多田 扱い易くて良いよ
俊介 扱い易い。どこが
多田 ちゃんと理解すれば、こんなに分かり易い事はないんだ。皆の行動は、
俊介 それぞれの利になっっている。俊介君も、ちゃんと理解すれば簡単さ
どう
多田 変な人達だと思えばいいんだ
俊介 (苦笑し) え
多田 な、簡単だろう
俊介 変人の思考が僕には理解できないもの。やはり難しいままで
多田 ああ、じゃあ言い方を変えよう。変な人達になりたい平凡な人達だ。僕
らの想像の範囲内で全ての出来事は起こる。僕らが、ああ変だなあと思
う事を彼らはするんだ。そう見せたいから。簡単だろう
俊介 ここの人らは狂人でしょう
多田 狂ってなんかいないさ。至極マトモだよ。可愛いぐらい。見ていると楽
しくてね、つい通つてしまう。兄弟同士でそのフリに翻弄されゆく様は
あの小説よりも見応えがあるよ。でも百子さんまで巻き込んだのは、申
し訳なかったね、ごめんね
俊介 ・・もういいですよ。今日だって、改めてちゃんとご挨拶にと思ったん
だから
多田 家は落ち着いた
俊介 ええ。やはり姉さんはほとんど帰らないけど
多田 東京と行き来しているんだろう
俊介 ちゃんとやっているなら、それで良いんです
多田 寛大になったなあ
俊介 双次君だけみれば、まあ、理解の範疇だからね。姉さんも子供じゃない
し。僕がとやかく言えば言う程、姉さん達は突飛な行動に出かねない、
そういう危険を察知して
多田 もっと追い詰めていたら、どうなっていたんだろう
俊介 追い詰めていたら
多田 だからさ、俊介君の言う突飛な行動というやつだよ。どんな事をする
の・・したのだろうね、もっと追い詰めていたら

俊介 心中とか

多田 ロマンチストだね

俊介 じゃあ、多田君はどんな想像をするの

多田 ポルノ。百子さんとの性交渉を赤裸々に書いた本の出版

俊介 いやー、・・・それは嫌だなあ、・・・(想像し頭を振る) 僕が許さないよ

多田 でも、やるかもしれない。君が嫌がる自らの行動を想像すれば、容易に

思いつく手段だ。面白いだろ

俊介 なが

多田 こうやって考えると、まるで僕が小説を動かしているような錯覚に陥る。

いや、錯覚では無いかもしれないね。もう既に登場人物の一人だからね。

物語に人は翻弄されるのではなく、誰かに翻弄される人々が物語になる

んだ。だから僕は、出演するのであれば、書き手を超える役柄になりた

いとそう思う

俊介 じゃあ、舵を取りマトモな小説へと移行させてほしいね

多田 気が向けばね

俊介 (溜息) 誰も居ないの

多田 七子ちゃん以外は、居ないだろうよ

俊介 じゃあ、出直そうかな

多田 そうか

俊介 多田君は

多田 もう少し居てみるよ

俊介 そう。あ

多田 なんだい

俊介 じゃあ何故、この人達はおかしいフリをしていたの

多田 変な目で見られたかったからだよ

俊介 それじゃやっぱり変人だ

多田 ご両親が失踪したと言ったろ。あれ嘘なんだ。ここのご両親、殺し合っ
ちやっただよ。白昼、人込みの中で。お母さんがお父さんに火を点け
たまでは良かったんだけど、灯油がね、思いのほか周りに広がってたら
しくて、小料理屋だったかカフェだったか忘れたけど全焼したんだって。
それでたくさん人が死んだんだって。残ったのは、父親母親・・・どちら
だったかな(という多田の即席作り話)

俊介 ・・・あ、え

多田 マトモでいたら、非難されるだろう

俊介 ああ

多田 だからじゃないかと、僕は睨んでいる

俊介 そう

多田 そう。そうなんだ

俊介は呆然と退場する。

多田 誰かに翻弄される人が、物語になる

多田は七子の元へ移動する。

七子 あ

多田 七子ちゃん

七子 (身体を背ける)

多田 またご機嫌斜めか。誰もいないよ、のんびりくつろごうよ

七子 (首を横にふる)

多田 百子さんの話をしてやろうか

七子 百子さん

多田 百子さんは東京で双次君と一緒に暮らしているんだよ

七子 一緒に

多田 一つ話したから、七子ちゃんも一つ。七子ちゃん立って

七子 うん

多田 もう、みんなフリをするのを止めただろう。だから君も、ね、七男君

多田は七子の着物の裾をまくり、男性器を確認し微笑む。

七子 なあに

多田 どうして、どうしてどうして、どうして女の子のフリしてるんだい

七子 え

多田 七男君だったよね、名前、昔はそうだったよね

七子 いいやだ、いいやだ

多田 男の子でいいじゃないか

四美美が飛び出してくる

四美美 あら、多田さん。お手紙

多田 無いよ。君になんて届いた事ないだろう

四英美 何しているの

多田 何もしていないよ、ねえ七男君

四英美 七子よ。七子は女の子よ

多田 どうして女の子

四英美 これ以上、矢代から変な男子は出せないもの。女の子なら、家に籠もりきりだろうが、学校に通よわ無かるうが、まだ世間様は許してくれるでしょう

多田 なんだそれ。馬っ鹿みたーい

四英美 馬鹿じゃないわ、真剣に考えた結果よ

七子 私は女の子よ。こうしてその日を待っているの

多田 その日

四英美 両親が帰ってくる日よ

多田 夫婦だけで夜逃げしておいて今更

七子 初潮を迎えるその日よ

多田 (爆笑する)

四英美 おかしくなんかありません、七子は、七子は

多田 いや、むしろ僕には好都合なんだけどね。毎日通ったり、こうしたり、こうしたって、女の子の格好をしてたら変に思われないからね。男の子っていいなあ

四英美 あ、そう。・・気持ち悪い、七子に触らないで

多田 四英美さんに言われたくないよー。ねえ七男君、百子さんとこ会いに行こう。二人で列車に乗って

七子 え、えー

四英美 駄目よ、そんな格好で外なんか出ちゃ。なんて罵られるか。町中から変な目で見られるわよ・・駄目、お願い七子を連れて行かないで。ずっとここに居ると約束したのよ、煩わしさから私が守ってあげるから、七子はずっとここに居る、居たいと言ったの。ね、そうよね

七子 うん

多田 子供ながらの同情心でしょう

四英美 違う、違うわ。七子はこういう格好が好きなんだもの

七子 うん

四英美 ほら

多田 行こうよ

七子 ええと

四芙美 七子

七子 うんと・・・お姉ちゃん、ちゃんとしてないからなあ・・・

多田は七子の腕をひき退場。

四芙美は日記帳にひたすら記す。

四芙美

しかし次女の淡い恋心は、その男色に踏みにじられ・・・やっと冷静さを取り戻した、次女を要とした正しい家族に戻りました。出来た、出来た

四芙美はうつとりと滑稽に踊る。

踊りながら名札を居間へ、余裕なく自身向きに並べる。

四芙美

どうかしら、正しい家族のお話。この方がね、みんな楽でいいでしょう。

ごろごろしていれば良いのよ、私がなんでもしてあげる

四芙美が床に赤い布を敷く。

双次がとことと登場。日記帳を読む。

双次

ひどい。ひどく、つまらない話だ。面白味がまるで無い

四芙美

兄さんも手伝って

双次

謙虚でなければならぬと言ったろ

四芙美

それ、どけて

双次

覗き返すのなら、より謙虚じゃなきゃ。中毒性があるからね、気をつけ

ろよ。他人の物語に踏み込んで当然と思うように、なる

四芙美

踏み込んでなんかいないじゃない

双次

(日記にさらさらと記す) 居ても居なくても同じだった。担がれ、落とされた事に気付かぬ者の哀れ・・・これは七子の台詞だったっけ

七子がとぼとぼと舞い戻る。

四芙美

七子

七子

お姉ちゃん、私、女の子だから自分じゃ何も出来ないの

四芙美

そう

七子

歩いたり、人とお話したり、避けたり、音とか、そういうのも嫌なの

四芙美

そう

七子 (着物の袖をかざし) 可愛い

四芙美 ええ、勿論。よく似合う

七子 えへへ。百子さんには会いたいけれど、お人形さんみたいに私が可愛い
のなら、百子さんから会いに来てくれると思うの

四芙美 そうよね

七子 ね

四芙美 多田さんなんか家に入れて、姉さん馬鹿な事したわ。自分の事ばかり考
えて、ごめんさい

七子と四芙美は女部屋へ戻る。

四芙美 守らせてね。貴方をずっと守らせて。そうでなきゃ私、これのどこにも
出てこられないの

七子 出てるよいるよ。ほら、ここに(日記を指し)

四芙美 私の出番、あるかしら

七子 あるよ、ほら最初の頁

矢代家が全員集合。布を敷き、雛壇を完成させる。

四芙美 ああ本当。最初の頁には、世間様からの非難に戸惑い、逃げる兄弟の姿
と、それを正そうとする私の姿がありました。ああ懐かしい

双次 最初の頃の兄弟といえは、ああ、喧騒の日々だった

六摘 学校の女の子、みんな口をきいてくれなくなったの

三津子 私なんて破談寸前よ。一要兄さん

一要 考えてるよ

六摘 兄さん達でなんとかしてよ

一要 だから、ちよっと静かにしてくれ

五太郎 倒産の話、俺が担当になったよ。当事者の方が巧く書けるだろうって

一要 働けるだけマシだろ

五太郎 長男は一要兄さんだろ

三津子 双次兄さんに学校中退してもらったら

五太郎 まるで親父と一緒にじゃないか

一要 俺が解雇されたのは俺の責任か

五太郎 俺にだけ押し付けないでって言っただけだよ

三津子 もう私は関係ありませんから勝手にやって頂戴

一 要 お前

六 摘 父さんと母さん探してきてよお

三津子 首になったんだからこれから時間たくさんあるでしょう

一 要 お前

三津子 私だって辛いだよ

六 摘 喧嘩しないで、嫌あ

四 芙美 まるで昨日の事のように。これ、昨日の事じゃないの

双次 と、狂言じみた事を言う四芙美だ。過去の反芻によつてしか安らげぬ妹

四 芙美 大丈夫よ、皆、大丈夫

四芙美は嬉々として名札を各々の場所へ並べる。

兄弟達は対照的に、打ちひしがれぐったりと力なく。

三津子 え。ああ四芙美いたの

五太郎 いいよ姉さんは出てこなくて

一 要 俺達でなんとかするから

六 摘 (泣いている)

四 芙美 いいから座ってみて。・・・またこんな日が、こないかなあ

雛壇、二段目に三津子、六摘。三段目に一 要、五太郎が座する。

四 芙美 双次兄さんは、そこ

四芙美は双次へ三段目を勧め、自身は七子と二段目に座する。

四 芙美 はい

双次 一つの話

四 芙美 昔の話

兄弟達はいぶかしげに立ち上げる。

六 摘 おかしいわ

三津子 変だわ

一 要 ちゃんとしていない

四芙美 え

五太郎 違うよね

六摘 違うわ

三津子 おかしいわ

兄弟達は話し合いながら退場し、

百子、俊介、多田、溝馳を連れ戻す。

三津子 三人官女でしょう

六摘 多分そうだと思う。五人囃子と・

多田 僕も一番上が良いんだけど

俊介 同感、あそこは腑に落ちないね

溝馳 いいんです

五太郎 なんでもいいよ

一要 よくない

五太郎 ちゃんとしてれば、なんでも

四芙美 勝手に増やさないで・

雛壇一段目に双次と百子、二段目に三津子、六摘、七子、

三段目に一要、五太郎、多田、溝馳、俊介が座する。

双次 いらつしやい

百子 お邪魔します

双次 これが僕の全てです。僕は今まで、ここで書をしたためていました。ここからは、あなたの元で書きます。それで構いませんか。駄目と言われれば去るまでです

百子 私だけを書いて下さい

双次 君のそういう凶々しさというか、断定的な物言いが堪らないんです

四芙美 無い、無いー

双次 どうした

四芙美 私の場所、無いじゃない、無い

皆、雛祭りらしい各々の装飾品を装着する。

誰も口を開こうとしない。

四芙美 六摘

六摘 四芙美姉さんの言う事は難しいわ

四芙美 五太郎

五太郎 なあに

四芙美 一要兄さん

一要 ちゃんと、なってるぞ

四芙美 三津子姉さん

三津子 正しい形よ

四芙美 多田さん

多田 七男君も、こつちじゃないのか

四芙美 溝馳さん

溝馳 いや、満足です

四芙美 百子さん

百子 本当に、お人形さんのようね私達

四芙美 ・・・・

俊介 僕に何を求めようってんです

四芙美 私の場所をよこしなさいよー。双次兄さん、見て、私、こんなにおかし

くなつちやったわ

双次 おかしいかな

百子 私は、ここに座ろうと努めたから座れたのよ

皆、驚いて百子を見る。

三津子 正論ね

皆が笑う

四芙美 ・・・・いーれーてー

誰も応えない。どころか欠伸を始める。

四芙美は日記を読み耽る。

七子が降りて、四芙美に席と日記を交換してやる。

四芙美 いいの

七子 うん

四英美は満面の笑顔で着席。

四英美 嬉しい。安心する。嬉しいね

七子 みんな、退屈そうじゃあ

双次 そう見えるなら、人の文字など塗りつぶして構わないのでは

双次も大欠伸をし、皆、固まる。

七子は日記にさらさらと。

七子 ……一生涯外に出ずに生きるには、まず

双次 翻弄される人々が、始まりを

皆、はっと目を見開き、暗転。

幕